

# 朝日 俳壇 歌壇



〈アオモジ I〉 日高理恵子

● 永田和宏選

零度には零度の熱の確とあり中学受験の子ら  
降りる駅 (神戸市) 松本 淳一  
ピヨヨンと黄泉の子に来るメールあり又お  
うなど 聞いたかおーい (田辺市) 龍田 早苗  
桐島とふひと近きにけりひとはみな何者かと  
して生きてるなり (東京都) 浅倉 修  
いつだってそのときなのにそのときをのがし  
てしまつてあのときという (熊本市) 阿部 芳夫  
良いことが何もなかった一月の末に探査機蘇  
生のニュース (仙台市) 二瓶 真  
SLIMなる月探査機は、神酒の海に軟着  
陸す足のもつれて (大分市) 岡 義一  
新聞にこの文字絶えず家計簿に書いてみたき  
や裏金ありと (岸和田市) 西村 郁子  
夕焼けの配られてゆく部屋ごとくにひと背負  
いて人の帰りの来 (大阪市) 多治川紀子  
ユキヤナギの白き小花がゆれてゐた大震災前  
の幸せな日々 (国立市) 半杭 肇子  
今日もまた酒税を呑みてその上に消費税まで  
二本呑みたり (柏市) 佐藤 和裕

【評】松本さん、零度は絶対温度では273K。零度でも確かに熱はある。零度の寒気の中の受験生たち。龍田さん、亡くなったのを知らずに来るメール。「おーい」が悲しい。浅倉さん、何者かを消して生きざるを得なかった生涯もある。

● 馬場あき子選

蠟梅と寒木瓜の咲くその奥の山羊の小屋から  
呼びかけられる (松阪市) こやまはつみ  
荒海の魚貝売るし朝市の能登の言葉のやさ  
しかりきよ (横濱市) 米長百合子  
口笛に腹をゆすりて駆けてくる仔牛に指を吸  
はせるをとこ (厚木市) 北村 純一  
難読の地名は多く世にあれど山形に及位、無  
音、左沢 (札幌市) 伊藤 哲  
☆アルパムを見ながら思ふ背広など着たことも  
なき父の一生 (大分市) 野田 孝夫  
デブリとふもの人間を睨み続けをりその塊の  
赤き眼光 (福島市) 美原 凍子  
梅檀の鈴生りの実も啄まれ疎らとなりて春立  
ちにけり (水戸市) 檜山佳与子  
こんな時に勉強こんな時に受験避避する子の  
引くスーツケース (埼玉県) 小林 淳子  
剪定をすれば樹液の滴りて葉なきキウイの枝  
はもう春 (前橋市) 荻原 葉月  
神宮に能登にも福をまぐ大の里関の大  
きな掌 (鹿嶋市) 大能佳世子

【評】第一首は香り高い蠟梅と明るい木瓜の花が春の気配を漂わせる。その向こうにある山羊小屋が似ている。山羊の声も「春だよ」と呼び掛けているようだ。第二首は能登の朝市の思い出。荒海に沿うくらしの中のやわらかなお国ことばが心に残る。

● 佐佐木幸綱選

若くして喘息となり喘ぎつつ今日百歳の誕生  
日なり (福島市) 菅野 泰治  
お母さんと書かれしメールは長男で母上様と  
あるは次男 (津市) 亀井百合子  
月末のおくやみ欄に一日に亡くなりし人輪島  
に数多 (小松市) 田中ゆみか  
引越しの荷物次々運び出す一人娘が家を出る  
春 (さいたま市) 片岡 輝雄  
高齢化に罪あるように語られる能登に崩壊家  
屋多きを (水戸市) 中原千絵子  
シャンパーでできずに髪を切るといふ能登の  
少女よとつても素敵 (老後市) 篠崎美代子  
☆アルパムを見ながら思ふ背広など着たことも  
なき父の一生 (大分市) 野田 孝夫  
「ママチャリにヘルメットって合わないね」  
それでもいいのかぶって通勤 (東京都) 増田 麻美  
想い出の小道通らぬストリートビューもと実  
家へは空から訪ねる (京都市) 赤見坂千春  
「後悔をしているか」「はい」と答える桐島  
某の孤独な一生 (我孫子市) 森住 昌弘

【評】第一首、百歳を迎えた作者の感慨である。さらなる御長寿をお祈りする。第二首、名前を見なくても分かる長男と次男のメール。それぞれの個性がきわまつ。第十首、連続企業爆破事件の容疑者を名乗って死んだ男の歌が多くあった。

● 高野公彦選

九冬を火鉢にししきし日々ありき夫にわたし  
に清少納言に (堺市) 丸野 幸子  
政治家の息子や娘が政治家になるこの国の多  
臓器不全 (観音寺市) 篠原 俊則  
幼少時仮面ライダーに成るゆめが獄舎の鏡に  
シヨッカーひとり (網走市) 池田 行吉  
令和にも女性の容姿や年齢を揶揄する昭和が  
生きのびている (横濱市) 人見 江一  
異動して初めての業務する日々うらおいは  
チョコと旅の計画 (富山市) 松田 梨子  
朝6時世界遺産の姫路城の一周2キロを歩く  
賢沢 (姫路市) 箭吹 征一  
人伝に聞くほかはなし認知症患者になりし友  
のその後を (豊中市) 夏秋 淳子  
トランプの予備選勝聞きながら茹でるうどん  
んは鍋で暴れる (五所川原市) 戸沢大二郎  
朝刊の配達時刻雪の日も違ふことなき人柄思  
う (下野市) 若島 安子  
翌朝にまた残っているその匂い老いの二人のた  
まの焼き肉 (苫小牧市) 本波 裕樹

【評】第一首、今はエアコンで便利だが、昔の火鉢で取る暖には味わいがあった。清少納言も火桶で暖まった。九冬は、冬期九十日のこと。二首目、「多臓器不全」は政界の混迷を鋭く突いた比喻表現。三首目、人生回顧の歌。作者は服役中の人。

## うたをよむ パレスチナの歌

高良 真実

ガザでは人が殺されている。けれど  
も、その気になれば報道から目を背ける  
こともできてしまう。  
だんだんに無感覚となる報道はウクラ  
イナからガザに移れど 渡英子  
角川『短歌』二〇二四年二月号から引  
いた。正直な歌だ。自分自身が無感覚と  
なりつつあることへの批判でもある。  
思はねばパレスチナいま無きことし煮  
え湯のやうな夏のかげろふ  
小島ゆかり『憂春』  
ともに二〇〇〇年代の歌集から引い  
た。小島の歌は挑発的だ。何かを思わな  
い。これは無意識の行為だが、その無意識の  
時々に、私たちはパレスチナを無きもの  
のごとく扱っているのだと突きつける。  
奥田の歌には「第三次中東戦争勃発の  
日」と詞書がある。「我」が開戦日に生  
まれたのは偶然だが、短歌として書き留  
めると、パレスチナの人々は同時代人と  
して現前し、「我」の生涯はパレスチナ  
の苦しみの時間として意識化される。  
歌集を読んでいると、不意にこうした  
未来への問いかけに出会うことがある。  
沙にさまよう今も幼き飢えしなご妻  
よたやすき悲しみはいうな  
近藤芳美『黒豹』  
第三次中東戦争当時の歌を引いた。過  
去の短歌は今日への問いかけである。今  
日詠まれる短歌もいざれそうなる。歌を  
作る際には、今日だけでなく、未来へ向  
けてどのような問いを投げかけるのかも  
問われているのだろう。(歌人)

第35回日本伝統俳句協会賞 協会賞は勝村博さん(75)＝岡山県＝の「阿波踊」(30句)に、新人賞は一倉小鳥さん(49)＝神奈川県＝の「葉紐」(30句)に決まった。長谷川權著「小林一茶」100句を精選し、批評を加えた。「誰にでもわかる言葉、細やかな心理描写……近代俳句は一茶からはじまる」(河出文庫・880円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。